

日本銀行本店【業務編】

前回の建物編に続いて、今回は日本銀行の業務の現場にご案内いたします。普段の見学ツアーではお見せできない「現場」に足を踏み入れ、日銀の日常の姿を紙面を通して体感してください。新聞やテレビで目にするだけの「日銀」という言葉に、よりリアルなイメージが広がってきませんか。



政策委員会の会議場。金融政策をはじめとする日本銀行の重要事項は、9人の政策委員会のメンバーによって、この場で決定される（右頁）。日々金融市場の動向をモニタリングし、オペレーションを実行する金融調節の現場（上左）。時々刻々と移りゆく金利や株価、為替など市場を丹念にウオッチしつつ、市場参加者から細やかに情報収集して、市場動向の分析を行う（上右）。



【政策委員会】

政策委員会会議室の大きな円卓では、日本経済を左右するような議論が行われる。ここに積み重ねられた時間が、そのまま日本現代史の一面でもある。そう思うと映画の中のようなドラマチックな空間に見えてくるのだった。

入り口から一番奥の正面が議長席。九名の政策委員から互選で選ばれた議長、今は日銀総裁が座る。副総裁二名。審議委員六名。金融政策

決定会合のときには財務省や内閣府からの出席者も円卓を囲む。執行部からの説明に基づいて議論し、書類にサインして採決をとる。時には議論が長時間に及ぶこともあるため、数分の休憩が適当にはさまれる。テーブルには水しかないが、休憩用として脇の机にはコーヒートビスケツトが用意されているという。緊迫した議論であればあるほど、それは重要な用意ではなからうか。

【金融市場局・オペレーションルーム】

金融政策を実現するためのコントロールを受け持っているのが金融市場局。市場の資金量を測り、マーケット状況をヒアリングし、それらの情報をもとに前述の金融政策決定会合で決められた政策を実現するためオペレーションを実行する。ヒアリングチームは電話で金融機関から状況や予測を聞く。結果は集約され、調節案とともに担当総括や局長に報告され、決定が下される。スリリングで、当然ながら判断に悩むことも多い部署だ。例えば金融政策決定会合が開かれているとき、市場で誰もが利上げを予測して動いていたとしても、政策変更はされていないのだ

から従来の金利を目標にコントロールを続けなくてはならない。抑えようと資金を供給すれば、金融機関が日銀に義務として毎月十六日から翌月の十五日までの間に一定割合の額を預けることになっている準備預金の残高が積みあがってしまう。その結果、積み期の後のほうになると、積みねばならない金額が少なくなり、コントロールが利きにくくなる。そのことを勘案しつつ、その日の金利を抑えるための供給額を決めねばならない。また積みめの最終日の十五日に、もう積みねばならない額は少なくなっている、相応の額は市場にないと決済に支障を来す。いくらなら目標近くに落ちつくか。このような判断には悩むという。

【業務局・新館営業場】

オペレーションによる調節といっても、実際に金融機関との取引、例えば国債を買うなどの受け渡しをするのは、業務局である。金融機関が日銀に持っている当座預金の出し入れや、金融機関間および日銀と金融機関との間の決済を行い、また政府の預金を預かったり受け払いを行っていてもいる部署だ。決定会合で議決さ

れたことが具体的に社会に実現する、まさに窓口である。普通の銀行に似た営業場だが、金融機関と結び日銀ネットワークを構築したことで、実際に窓口に来る人は少なくなった。かつては書面の審査や処理が中心だった業務も、今ではオンラインネットワークの構築や改善、その

円滑な運営が中心に変化した。それでも取引先とのコミュニケーションが重要なことは変わらず、サービス業として自覚されているという。無事に行われて当たり前とされる目立たない職場だが、言い換えれば、目立たないために日々努力を重ねなくてはならない部署であるらしい。



一見は一般の金融機関の窓口と変わらない新館1階の営業場。「銀行の銀行」でもある日銀を訪れるお客様の大半は金融機関だ。

【発券局・小口出納窓口】

現金を取り扱う発券局には、私物の現金は持ちこめない。職員も自分の現金はロッカーに入れて、「入ります」と声をかけて入室する。そうして入ると、テーブルの上に焼けたお札が並べられていた。火災に遭ったのか濡れて固まっていた札束を一枚ずつはがしたものだ。このような紙幣を点検し新たな札と引き換えるのは小口出納の仕事である。もはや真つ黒な断片にしか見えないものも、引き換えできるといふ。灰になっても形が崩れていなければ裏表の模様が確認できるので、ある程度の面積があれば大丈夫だといふ。ならば偽札でも交換できそうな気がしたが、燃やすとかえってお札かどうかはつきりするそう。

持ち込まれるのは焼けた札ばかりでなく、地中に埋めておいたら腐った、トイレに落とした、ビニールに包んでキムチの壺に入れておいたら浸透してしまったというものまであったという。フロア中に異臭が広がったそう。だが手袋を使うことはない。お札の感触を確かめるため、じかに触れたいからだ。くつついた



金融機関との間で、お金を支払ったり受け入れたりするための大口出納窓口。



持ち込まれた焼けたお札は、ピンセットで1枚1枚はがされ、面積を測定し、引き換え基準に則して新しいお札に引き換えられる(左)。真っ黒に燃えてしまったお札でも、目を凝らすと「1000」の文字が読み取れる(上)。



全てがオートメーション化された戸田分館の鑑査室。疑わしいお札は弾き出され、最終的には熟練した職員の目によって鑑査される。

お札をはがすにはピンセットを使うが、一枚に見えて二枚張り付いているなどとは手で触ってこそ分かる。キムチ漬けの札に携わった担当員たちからはしばらく匂いがとれなかったそうだ。このような苦労はあるが、お客さんとのつながりを実感できるという喜びもあるという。とくに阪神・淡路大震災のときは、焼けた札が連日大量に持ち込まれ、大動員をかけて作業し、涙とともに感謝されたこともあった。そのようなドラマチックな交流を体験できる部署なのである。

である。

【発券局・大口出納窓口】

日銀から社会に出た紙幣は、金融機関から日銀に戻ってきた後に、金額が合っているか確認し、一枚ずつ真偽や状態を鑑査し、傷んだ紙幣は裁断する。だが莫大な金額である。入金のために一枚ずつ数えたり、ましてや鑑査することはできない。そこで機械で自動的にパッキングし、いったん金庫に収納される。一万円札なら一〇〇枚ごとの束が一〇個で一パック。それが四〇個ごとに一台のパレットに積まれ、エレベーターで金庫に運ばれる。そして改めて鑑査室へ送られる。パックは一つ一〇キロ、これを四〇パック載せたパレットを金庫まで運び、また金庫から鑑査室まで運ぶ。当然、重労働だ。ブロックのように積まれた紙幣の塊はお金に見えない。職員もお金として意識することはないという。きつと重い品物、なのではなからうか。

【発券局・戸田分館】

発券局戸田分館は、もっともセキュリティチェックが厳しい。私物の現金、荷物はロッカーに。備え付けのシューズに履き替え、金属探知

機でチェックされ、ようやく中へ。ここでは金融機関の人が入金すると、後はオートメーションで札束が運ばれ、金額や真偽の確認、傷んだ紙幣の排除、裁断が行われ、再梱包して金庫に収納される。その間、人は一切手を触れない。一台で一支店の処理ができる機械が五台ずつ六列にして扇形に並ぶ。計三〇台で一日に鑑査する札は、積み上げれば富士山の半分弱になるという。そうはいつでも機械にトラブルはつきものの。最後の皆は人だ。鑑査も機械が百パーセント判別することはできない。疑わしいものは排出され、人が鑑査するための部屋へ送られる。一〇〇枚につき二、三〇枚の割とい

う。万一偽札があっても、そこに混じってくる。最終的に見抜くのはやはり人なのである。戸田分館の職員はみな鑑定ができるという。一見は坦々とオートメーション機械が動いている場所だが、そばに待機しているのは、機械の仕組みに通じ、紙幣の真偽を見極める眼力も持った技能者たちなのだ。もし偽札を見逃せば、日本銀行はもちろん、円の価値、国家の信用も落とすことになる。一万円札が一万円として使える前提には、世の人の見えないところでさまざまな努力や工夫がされている。それが当たり前に行われているから、お金も当たり前に使えているということらしい。

INFORMATION 日本銀行本店見学

(注) 本文で今回ご紹介したエリアは、見学内容に含まれません。

●見学内容

日本銀行本館や地下金庫等の見学案内（無料）

住所：東京都中央区日本橋本石町2-1-1

見学日：月～金（除く祝日、12月29日～1月4日）

●見学時間

所要時間：約1時間（日本銀行紹介ビデオ上映約18分、店内見学 約40分）

原則として平日の

①9:45～ ②11:00～ ③13:30～ ④15:00～

対象：原則中学生以上、人数制限あり

●申込方法

事前予約制（申込みは、希望日の3カ月～1週間前まで）

申込先：日本銀行情報サービス局広聴担当（見学担当あて）予約受付直通：03-3277-2815（予約受付は平日9:30～17:00）

詳しくはホームページを

<http://www.boj.or.jp/type/etc/service/annai03.htm>

●その他

英語案内もあり（要相談）

ホームページでは「バーチャル見学ツアー」を実施

<http://www.boj.or.jp/tour/index.htm>